

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	公益社団法人宝生会	
施 設 名	宝生能楽堂	
助成対象活動名	人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	2,924	(千円)
公 演 事 業		(千円)
人材養成事業	419	(千円)
普及啓発事業	2,505	(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【人材養成事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	東京青雲会	6月27日	能「枕慈童」金野泰大、舞囃子「田村」金井賢郎「源氏供養」武田伊佐「小督」朝倉大輔	目標値	350
		宝生能楽堂		実績値	460
1	東京青雲会	10月24日	能「葛城」関直美、舞囃子「志賀」藤井秋雅、「放下僧」金森隆晋	目標値	350
		宝生能楽堂		実績値	212
2	インターンシップ制度	8月20日～31日	「稽古体験」、「文化財保護」、「能楽概論」 佐野弘宜、門脇幸恵、宮本圭造	目標値	10
		宝生能楽堂		実績値	10
2	インターンシップ制度	2月4日～16日	「能楽概論」「イベント企画」 「舞台マネジメント」 宝生和英、望月真也	目標値	10
		宝生能楽堂		実績値	2
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	720
				実績値	684

(2) 平成30年度実施事業一覧

【普及啓発事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	能+1	4月8日	「聴覚～自然音～」ジョー奥田、大倉源次郎	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	72
1	能+1	5月13日	「触覚～正座～」金子周司、澤田宏司	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	43
1	能+1	6月10日	「味覚～食事～」岡副真吾、辰巳満次郎	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	40
1	能+1	9月9日	「特別対談 現代役者からみた能」岡幸二郎、宝生和英	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	87
1	能+1	10月14日	「〇覚～第六感～」東雅夫、渡邊茂人	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	36
1	能+1	11月11日	「嗅覚～香り～」畑正高、金井雄資	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	61
2	文京区民能楽鑑賞会	1月27日	能「岩船」田崎甫、狂言「千鳥」山本則秀 解説 佐野登	目標値	400
		宝生能楽堂		実績値	412
3	夜能	4月27日	箏曲生田流「松竹梅」 能「巴」東川尚史	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	248
3	夜能	5月25日	尺八「鹿の遠音」大賀悠司 能「夜討曾我」澤田宏司	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	179
3	夜能	6月29日	長唄「松の翁」 能「通小町」高橋亘	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	246
3	夜能	9月28日	対談朗読 諏訪部順一 能「生田敦盛」水上優	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	457
3	夜能	11月30日	箏曲山田流「那須野」 能「殺生石」和久莊太郎	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	353
3	夜能	1月25日	ガムラン演奏「ラーマヤナ」皆川厚一、能「車僧」金野泰大	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	131
3	夜能	2月22日	雅楽「越天楽」中田太三 能「草薙」當山淳司	目標値	150
		宝生能楽堂		実績値	122
平成30年度の目標値、実績値				目標値	2,350
				実績値	2,487

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

宝生能楽堂は、水道橋駅からほど近い現地に昭和3年からあり、宝生流の中心拠点として役割を果たすほか、他流の催しにも活用され、広く能楽の普及・発展への活動の場となっている。昨年度、文京区の地域の方に向けての地域貢献、また「能楽」の普及啓発という点において実施した多くの事業については、概ね順調に進められた。ただし「能+1」については、通常の能の公演は、いわゆる“通”の方ばかりが観覧していて初心者にはちょっと敷居が高いというお声をいただくこともあった中で、「能」とは異なる文化や芸術とのコラボレーション企画を実施することで、「能」という芸術を少しでも多くの方に観ていただければとの考えによるものであった。しかしながら目標とする参加人数になかなか達しなかったため、期の途中で打ち切りという形にはなってしまった。一方、「夜能」については、目標数を大幅に上回るお客様にご来場いただいた公演もあるなど、次に繋がるものもあった。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

「文京区民能楽鑑賞会」については、30年以上に渡り公演を行っており、継続して行ってきたことで、区民の皆様にも地元にある「宝生能楽堂」の存在を広く知ってもらっており、「能楽」が身近な存在と感じていただけているものと思う。このことは、文京区としても、世界無形文化遺産である「能楽」の舞台を要する区として、日本国内でも貴重な存在として区の存在をアピールする好材料ではないかと思われ、今後も継続すべきものと考えている。若手育成のための「東京青雲会」公演については、演者にとっては、内部関係者ではなく、お客様を目の前にすることで、舞台感覚を身につけられるため、稽古以上の稽古として有効である。また、無料で公開していることもあり、地域の方や能楽に関心を持っていただいている方にも気軽に能楽に親しんでいただけるよい機会となっている。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

事業途中で中止となってしまった「能+1」は集客に苦勞し、目標を達成したとはお世辞にも言えない結果となったが、異業種の方をゲストに能楽との接点を見出す企画は様々な可能性を生み出すと考えられるので、今後も機会があれば企画していきたいと思っている。

その他「文京区民能楽鑑賞会」「夜能」「東京青雲会」については、公演による集客目標の達成、未達成の差があったが、概ね目標値に近い数字が確保できたのではないかと考えている。事業内容についても文京区との連携の強化を図り、その他事業への波及効果が表れていること、夜能における邦楽演奏では東京芸術大学の学生を起用し、舞台経験を積ませることに協力出来ていることは評価に値するところである。

能楽堂インターンシップ事業について、8月開催が10名の参加者を確保出来たが、2月開催では2名の参加者ということで人数目標は達成できなかったが、少人数だった分を内容を密にすることが出来た。その結果長期にわたって継続的に宝生会の事業に携わる「長期インターン」事業について2月開催時に企画として出た内容を、9月に美術大学生向けイベントとして開催する準備を進める段階になっている。当初はそこまでの目標は立てていなかったが、学生たちの自主的な企画をもとに、これまで能楽界では開催されたことのない会を開催すること、そしてこれを成功裏に終える事が出来れば、大きな価値と言えるのではないかと。一つにインターン参加生で度々協議を重ねることで絆を深めることが出来る点、二つにクラウドファンディングなどこれまでに経験したことのない分野に挑む挑戦的な戦略、さらには能楽堂のサロンの活用という新たな利用目的を見出す点について、大いに期待しているところである。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

東京青雲会および文京区民能楽鑑賞会については、事業内容、予算ともほぼ計画通りの内容で進めることが出来た。今後は当事業でいかに他からの協賛を得るかを課題とする段階に進んだと感じている。

能+1については公演数の減少を余儀なくされ、全体的にも予算を抑えての事業となった。またインターンシップ事業も然り、当初より費用を掛けない予算組をしていたこともあり、助成金報告では費用の変動割合がギリギリであったが、法人決算へはほとんど影響がなかった。全体的に事業期間については能+1事業以外は予定通りに進められた。

予算面について夜能事業の費用に計上している大日本印刷（株）に一括委託している字幕解説費（200万）についての検証については以下の通り。

スマホやタブレットが現在ほとんどの人が持っているまでに普及しているが、ウェアラブルについては認知度が低いことが、機器の価格にも影響している点、普及台数に比例してそのシステム運用にかかる経費も高額になる点が、200万という突出した経費になっている理由であるが、今後機器が普及していくにつれて、その利用価値は増していくものと考えられ、それに応じて費用感が抑えられていくことを期待している。

宝生能楽堂における字幕解説をウェアラブルにこだわる理由は、タブレットやスマホではそれを見ていると舞台を見ることが出来ないこと、イヤホンガイドは本来の能の音が音声ガイドに消されてしまうことが難点であり、隣の人でもスマホ画面のバックライトやイヤホンガイドのイヤホンからの音漏れに影響されることが考えられるためである。

その点ウェアラブル端末は掛けている人だけ字幕が見え、しかも舞台から目を離すことなく鑑賞することが出来るのが利点であり、10年後20年後に向け、この利点を生かすべく決して安い値段ではないが先行投資している状態という考え方である。当助成金はその役に立っていることは明白である。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当年度助成金の要望時に「劇場・音楽堂等の社会的役割（ミッション）」存在意義について記載した内容に「宝生流能楽継承の場」と「使いやすい能楽堂」という点を挙げさせていただいたが、後者については私共が主催する公演向けというよりも、他能楽団体や能楽以外の目的での使用を推進する目的要素が強い為、主に宝生流能楽継承という大義が、当能楽堂の大部分を占める役割であると考えている。

宝生流能楽公演として夜能、文京区民能楽鑑賞会が該当するが、何よりも能舞台の素晴らしさを周知することが何よりの命題で、そもそも能楽は歌舞伎などと違い1か月にわたるようなロングラン公演を行うことがほぼありません。それは能楽が能面や装束といった文化財や重要美術品を演者が身に着けて演じる唯一の舞台演劇であり、同じ能面や装束を連続して使うことは貴重な文化財・美術品を消耗・破壊させることになるからである。さらに一期一会の精神のもと、一つの舞台に懸ける能楽師の想いが舞台上に込められている。能楽のしきたりとしてリハーサルやゲネプロを行わない、申合せと言われる確認のためのリハーサルが行われるくらいで本番に臨んでいる。これは本番のために神経を集中させ、何度も精神を研ぎ澄まし続けることは人間には不可能だからである。

そうした真剣勝負の場を演じる能楽師、観客、能舞台が一体となって作り上げている、それが能楽の神髄であり、醍醐味と言える。主に利用する能楽師は自分たちの表現の場である能舞台に敬意を表し、必ず白足袋を履かないと上がれない、礼をして舞台上がるなどの作法を徹底している。それは能舞台が神聖なもので決して汚してはならない、そうした意識のもとで大事に使用してきた証である。切戸口という舞台の入り口が茶室のように小さく作られているのは、どんなに身分の高い人でも必ず頭を垂れて舞台上がることを強要するもので、宝生能楽堂としてはそうした認識を広く世間にアピールし、他の舞台芸術とは違った見方をしてもらえるような意識づくりを目指していきたい。

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

能楽の幽玄さ、厳格さを流布する一方で、そうした貴重な能楽堂を有効活用する企画も同時に求められている。現在日本全国各所に存在している能楽堂は能舞台を備えているのはもちろんだが、一部客席や舞台が収納可能であったりで別用途に使用出来る施設はあるものの、ほとんどは能舞台・客席・ロビーという形式が踏襲されていて、能楽以外の目的で使用することを目論んで建設されているものは皆無と言える。それはもちろん多目的ホールとは異なり、能楽を上演することに特化してというよりも、むしろ他目的での使用を拒否していた結果でもある。現状において宝生能楽堂もその点は同様であるが、他能楽堂と比べロビーが広い為、会議やロビーパーティーなどに利用できるのが利点である。そうした利点を生かし東京観光財団のユニークベニュー事業（文化施設等における飲食を伴った形式での国際会議等の開催）にも登録し、その利用価値をアピールしている。当助成事業でもあるインターンシップにおけるロビーでの講義も、会議用テーブルや椅子を設置するだけの広いスペースが確保出来るからであり、展示スペースにおける企画展示などで能楽堂にお越しのお客様に、写真や能面装束をご紹介出来ることも大きな利点である。宝生能楽堂も昭和54年の建設以降40年を迎え、いずれ建替えの問題が避けられないところだが、新たに建設する際には、能舞台の神聖さや能公演を充実して行うことの出来る本格的な能楽堂を造ることに加え、現代のニーズに沿った幅広い活用が可能な設備、固すぎず乱れすぎずといったバランスの良い能楽堂となるよう目指すものである。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

宝生能楽堂は能楽（特に宝生流能楽）を普及・発展させるための劇場であり、これまで能楽が何百年にもわたり受け継がれてきたことを踏まえ、今後もその立場は変わらないものと認識している。今生きている能楽師も自分が宝生流を受け継ぐ、次に引き継ぐ、次に引き継がせることが出来るような能楽師を育てる、100年200年先も受け継がれていくことを意識して、芸の継承を行っていくことから、それを可能にする能楽堂を維持していくことが我々に課せられた使命である。主宰している公演もお客様がその次のお客様にと広めていくこと、若手の学生に能楽愛好家を増やすことはもちろん、能楽の素晴らしさを伝えられる人材を育てる事、を目指して当助成事業は構築されている。芸能界でよくあるスターを育てることは必ずしも能楽界には当てはまらず、無論スターがいることで今瞬間的にはお客様を動員することが可能であるが、そのスターが後継者を育てることが出来なかつたり飽きられてしまったならば、一過性の動員で終わってしまうことになる。宝生能楽堂および宝生流で目指しているのは、スターの発掘ではなく安定感の継続というように、お客様に安心感を与える事の出来る能楽公演を提供することである。キーワードは月並ながら「若手層の発掘と充実」である。能楽師はもちろん主に観客の事を指しており、学校公演やワークショップで広く能楽を知らしめることと並行して、学生や社会人成り立ての人材で、単なる愛好家ではなくさらに能楽堂の運営に携わることのできる機会を提供し、そこに従事することで能楽に対する理解を深めること、それをSNSで発信することでさらに若手の興味を引く、というスパイラルを形成すること、特にインターンシップ事業はそうした広大な目標を持っている。数ある若者の中から意識レベルの高い学生、社会人を確保し、能楽を始めとした伝統文化への興味を引き出し、ひいては能楽の安定を目指すものである。